

市民研 通信

No.03 2010年7+8月 通巻130号

●市民研ホームページに掲載中の最新の論文

～すべてどなたでもダウンロードできます

巻頭言 食の総合科学研究会に参加してみませんか

小林友依 (市民研・食の総合科学研究会リーダー)

巻頭言 電子本、貸してください

上村光弘 (市民研・理事)

連載 科学技術コミュニケーションを問う

第10回 サイエンス・コミュニケーター再考

五島綾子 (サイエンスライター)

連載 住環境革命のために

第1回 長期優良住宅マンションのすすめ

鎌田功 (市民研住環境問題研究会)

翻訳資料 初期原爆調査を再検証する

前書き／一部史料の翻訳 関連年表

吉田由布子ほか市民研・低線量被曝研究会メンバー

●市民研サーチライト

【ナノテク・健康リスク】

吉田秀明氏が立ち上げている「白金ナノコロイドの安全性を考える科学者の会」は、科学的データをもとに白金ナノコロイドの人体内での効果及び安全性に強い疑念を表明している。食品などへの添加を見直す議論が必要であろう。これはナノ銀についても同断であろう。

【生殖技術・生殖医療】

近年に組織された、生殖補助医療関連の2つの会、「代理出産を問いただす会」と「第三者の関わる生殖技術について考える会」はともに専門家を中心に公開の研究会を重ねながら、問題点を整理し社会的な議論を提起しようとしている重要な取り組みである。研究会の報告が詳しく掲載されているのがありがたい。

【一般・情報検索】

Webcat Plus は、国立情報学研究所 (NII) が提供する無料の情報サービス。全国の大学図書館 1000 館や国立国会図書館の所蔵目録、新刊書の書影・目次 DB、古書店の在庫目録、電子書籍 DB など、本に関する様々な情報源を統合している。「連想検索」「一致検索」のほか、一時的に集めた情報を保存して自分の仮想の本棚を作る「連想×書棚」もある。

食の総合科学研究会に参加してみませんか



食は生命活動に必須というだけでなく、暮らしと環境の改善の基本となるものであり、食べ物と身体と料理の関係を(従来の栄養学に偏らず総合的に)科学の視点を持ち込んで解き明かしていくことで、今の私

たちの生活と社会を具体的に着実によりよくしていける、大変魅力的な領域です。市民研の「食の総合科学研究会」は、これまで砂糖、油・油脂、大豆、米、雑穀など代表的な食材を順次取り上げ、その由来と歴史的変遷、生産と流通と消費の構造、環境負荷、身体への影響などを多角的に調査を進めてきました。また、ゆでる、煮る、焼く、揚げる……といった料理のプロセスや調理法に着目し、それがなぜ必要で、おいしさや栄養と結びつくのかを調べてきましたが、その成果を生かして、科学実験と料理の技の学びを結合した新しい食育活動である「子ども料理科学教室」の10個のプログラムを開発し、学校や地域の活動に提供してきました。

今後私たちは次のような活動を具体化していくつもりですが、これらを一緒にすすめてくれるスタッフやボランティアが不足しています。この機会にぜひ、ご関心のある方々ならどなたでも(専門知識の有無は問いません)、お問い合わせ・ご参加・ご協力いただければと思います。

・子ども料理科学教室の「発酵」のプログラムの応用として“漬け物”に関する実験メニューを開発(8月22日(日)に文京区の施設で予備的实施、その後9月に本格実施)

・食と健康に関する幅広いフリートークの機会を設ける(10月)

・栄養疫学の専門家を招いての講演会の実施(11月)

・昨年実施した文京区内でのウォークラリーの2度目の実施(11月頃)

またこれに加えて

・有機農業の生産と流通に携わる仲間を訪ねての、農作業体験や食育のイベント

・仲間の料理人を招いて食事会(15名ほど)を実施し、自由な交流の機会とすること

も随時実施していく予定です。

あなたも、私たちの活動の輪に加わってみませんか?

【小林友依(市民研・食の総合科学研究会リーダー)】

電子本、貸してください



本は電子化されると言われて久しいが、最近になって国内の状況が慌ただしくなっている。今年3月には総務省・文科省・経産省が合同で「デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」を立ち上げた。また同月、出版社31社が日本電子書籍出版社協会を設立、7月には印刷大手2社が中心となって電子出版制作・流通協議会の設立を発表している。また、6月には国会図書館「納本制度審議会」が電子書籍の納本を義務づける答申を出した。

米国では、07年末にアマゾンが読書端末キンドルを売り出し、電子書籍市場が急拡大中だ。09年度の段階で、米国の電子書籍売り上げは約3億ドルで全書籍売り上げの約1.3%となっており、今年中に5億ドルを超えると言われている。今年7月には、いよいよグーグルが電子書籍販売に参入する。

これまで日本では、コミックなどは携帯電話向けにかなり電子化されて流通していたが、一般書籍に関してはさほど目立っていなかった。一般書の電子書籍数は米国にくらべて圧倒的に少ない。加えて、日本の出版業界には再販制度と委託制という紙の本の流通を減らしたくない事情がある。出版業界の構造変化への対応、著作権関係の問題、データフォーマットの整理など課題は多く残っている。紙の本はなくなりはない。だが、電子書籍が増えていくのは確実だ。

ところで、電子書籍の普及で図書館がどうなるか、個人的には非常に気になる所だ。米国では、すでに公共図書館が電子書籍の貸し出しをおこなっている。例えば、ニューヨーク公共図書館には約2万タイトルの電子書籍があり、PCにダウンロードして「借り」ることができる。1度に1冊だけダウンロードでき、紙の本と同じように借り手が多い電子書籍には順番待ちができるらしい。ダウンロードした電子書籍ファイルは期間が過ぎると読めなくなるそうだ。電子書籍はいくらでも複製が可能であり、順番待ちなど不要なはず。技術的に簡単に実現可能なことであっても、これまでの著者や出版社との関係を含めて社会的な仕組みを変えるのはかなり難しいみたいだ。

さて、日本で借りられるようになるのはいつだろうか?

【上村光弘(市民研・理事)】